岐阜教区テレフォン法話

第２組　　竹林寺　　森　考照

2007/8/08

今回は「信心」についてお話したいと思います。

蓮如上人の御文に「信心といえる二字をばまことのこころとよめるなり」と記されています。信心という言葉の信というお言葉は「まこと」とも受け取ることができます。

私たちは、その「まことのこころ」と、どう関わっているのでしょうか。人間は何かを拠り所として、何かを信ずるということがないと、生きていけない存在です。誰もが、みな信心を持っています。その信心に「まこと」という吟味を深めていくと、どうでしょうか。何を「まこと」とし、こころの支えにして生きようとしているのでしょうか。家族、自分、経験、才能、お金・・・。

しかし、日々の生活で「そうだ、これだ」と思い込んでいた「まことのこころ」が厳しい現実によって崩れていってしまう。絶望よりも、もっと厳しい現実に目を背けて、理想の信心を思い巡らしてしまうのです。「まことのこころ」とはイメージでも理想でもなく、もともと全ての存在に「確かに在るこころ」です。その意味を回復しない限り、私たちは人間として、今をほんとうに、活き活きと生きることができないで、空しく生きるといった感覚をもって、「まことのこころ」と関わっていくしかないのです。

親鸞聖人は、信心を智慧と言われます。私達がよく使う日常の知恵とは違います。私たちの知恵とは、その時代社会によって経験され、習得した中で生まれてくる知恵であります。しかし、聖人が言われる、「信心の智慧」の「智慧」とは、本来、そのものが持っている智慧であります。その智慧の働きが、念仏申す「今」、予想もつかなかった私に開いてくるのだと聖人は示されます。それは、いつの、どこにおいてでも、厳しい現実の只中にあって、全てのものを照らし出す世界を知っていくことにもつながるのです。

その「まこと」の世界に共に生きんと願う「こころ」を私達は、信心に生きると言い、本願に生きると言い、本来の智慧のはたらきをいのちと表現し、その、いのちに目覚めると言うのでしょう。今、いのちがあなたを生きている。